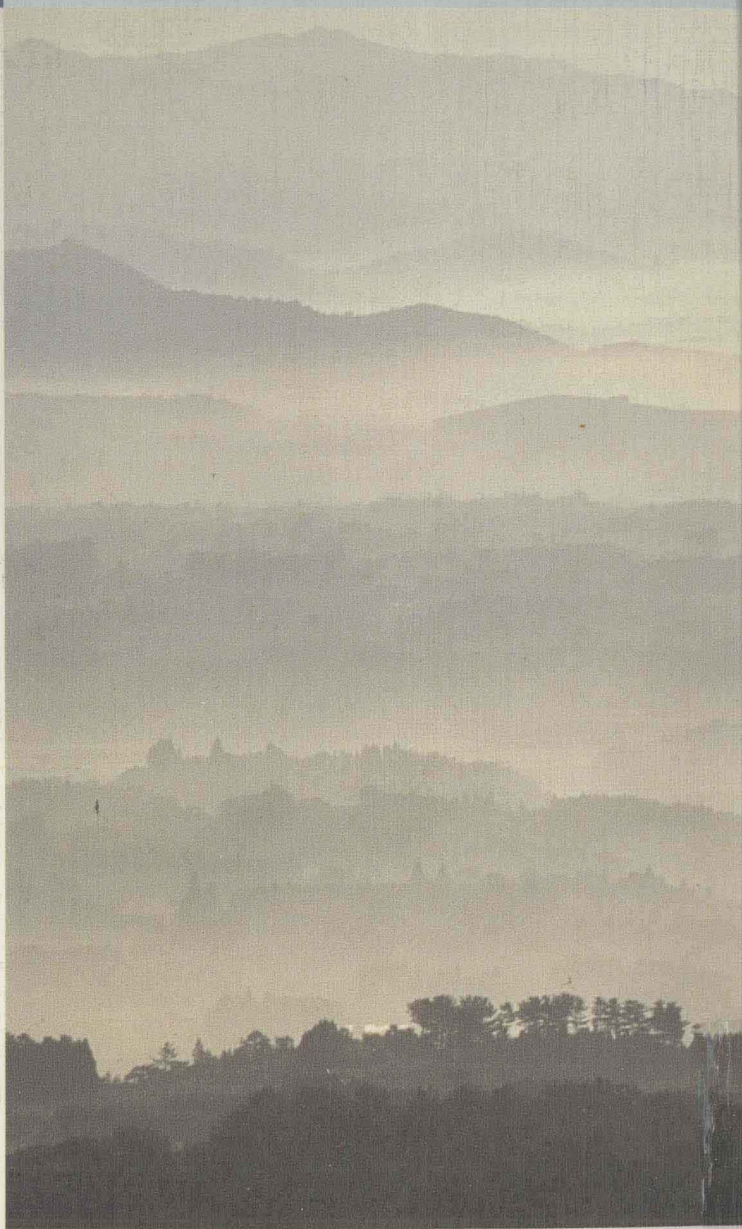


古代都市文学論

書紀・萬葉・源氏物語の世界

高橋文二・廣川勝美
神尾登喜子・駒木敏



選書

古代都市文学論

書紀・萬葉・源氏物語の世界

高橋文二・廣川勝美

神尾登喜子・駒木敏

翰林書房



高橋文二（たかはし・ぶんじ）

一九三八年東京に生れる。駒澤大学、同志社大学、京都大学などに学び、現在、駒澤大学において国文学（平安文学）を講ずる。

主な著書 『風景と共感覚―王朝文学試論―』（春秋社）

『三島由紀夫の世界―天逝の夢と不在の美学―』（新興社）

『紫式部日記』（桜楓社）など。

古代都市文学論

一九九四年十一月一日
第一刷

定価―二九〇〇円

（本体二八二六円）

著者―高橋文二、廣川勝美、神尾登喜子、駒木敏

発行者―今井 肇

発行所―株式会社翰林書房

〒110 東京都千代田区神田神保町1-32 電話（〇三）三二九四―〇五八八

装幀―石原 亮

印刷所―共信社

製本所―松栄堂製本所

Printed in Japan

ISBN4-906424-53-8

はじめに

古代都市文学である。

古代都市である。それはどこに求められるのか。まず、古代に都市はあったのか。

その文学である。古代都市の文学である。あるいは、古代の都市文学である。

人口の集住を都市の基本とするならば、それは歴史的な過去の時代にも見出すことができる。だが、このことは規模をぬきにしていえば近代の文明のもとにある都市と同じである。そのような具体性のみが強調されるわけではない。古代都市というとき、それだけがもつ何かがあるはずである。

古代都市はどこにあるのか。それはすでにない。その断片がわずかに、史書、記録などの文献、絵画や建造物、もしくは埋蔵文化財などに認められるだけである。古代都市そのものがすでに具体的な実態として存在するわけではない。むしろ、現代という時代からの視線のうちに像を結ぶところに浮かびあがるのが古代都市である。現代都市の見失ったものが古代都市といえなくもないのである。すでにして崩壊し解体しはてた都市、歴史の必然において終末を体験した都市である。それが古代都市である。

そのような古代都市を歴史の一時期において画するものの一つが、ここにいう文学である。

それは他の歴史的な時期において形成された文学とは異なる何ものである。古代都市がはじめて獲得し、古代都市の終末とともに運命を共にした文学である。まさに、それが古代都市そのものであるところの文学である。古代都市の一切がここにこめられているはずのものである。所詮、言語による表現でありつつ、それを超えて古代都市を支配するものである。

それを神話と呼ぶことはできない。すでに神々の時代から遙か遠くにきてしまった、歴史の淵源に位置する、まさに、天皇の時代である。天皇は、都を営むことによって天皇たりえた時代である。しかも、それは天皇が最初からそうしなければならぬこととしてあった。そのような意味で都の時代である。そのとき、言葉は、天地の理念を示し、天皇の都の理想を表わすものであった。それは神話の言葉ではない。歴史の言葉である。典拠を有する言葉といってもよい。歴史は、文字に記されることによって体系化され天皇のものとなる。天皇の歴史は、すなわち都の歴史でもある。

言葉や表現を通して都市性を古代にみたいのである。それは古代において言葉や表現そのものにおける都市性を問うことでもある。それこそがここにいう古代都市文学論である。

古代都市文学は、その基盤においても、言葉や表現においても、それ以前と明確に区分されるべきものである。すなわち、都城制によって営まれる天皇の都である。したがって、古代都市文学とは何かを問うことは、古代の天皇の都は、都市でありうるかということでもある。さらにいえば、皇都が本質とする古代都市性とは何かを問うことである。それは政治的・経済的な都市的機能をいうのではなく、むしろ、祭祀的・儀礼的な意味をいうのである。したがって、

ここに求められる言葉や表現もまた祭祀性や儀礼性を基本とする。

それこそが、古代都市を、それ以降の現代に至るまでの都市と分けるものである。

古代において、皇都は天皇の政治的、宗教的機能の具体化されたものであった。それは、古代国家の構想、理念に基づく地理的条件や空間的機能といった枠組みの中で造られる。

そのような皇都の理念は『日本書紀』神武天皇即位前紀において極めて明確に表現されている。理念なき皇都の造営はありえない。皇都は理念を集約的に具現している。とりわけ、藤原京以来の条坊制を有する皇都は、明らかに天地を祀り、四方を統べる天皇の都として営まれている。

そのような意味で、古代都市は、天皇のものである。皇都なくして古代天皇制はありえない。皇都は古代国家の中核である。皇都の規制の背後には、思想や信仰があるといえる。皇都は古代天皇制のもとにおける祭儀と朝儀のためにいとなまれた空間であるといえる。多くの古代都市が神殿都市であるとすれば、これは祭祀都市といえなくはない。それは都城制に先立つ皇都においても同様である。そして、藤原京以来の、平城京・平安京に至る、都城制による皇都は、旧い皇都のもつ政治的・宗教的機能を継承しつつ、中国の制を大幅に取り入れて出現したものである。

天皇の都は聖なる空間である。天地の理念、山河の體勢にしたがって宮地が占定され、皇都が造営される。天皇の居所を中核とする内裏と官衙が置かれ、その周囲に居住空間が営まれる。その格子状の構造は人工的であり、理想のプランに沿って新たな都市空間が造形される。しか

し、皇都はかかる都市空間のみによって成り立っているのではない。むしろ、四周の山河、そして、何よりも郊野を有することによって皇都は営まれている。四郊は都市的生活にとって不可欠である。

皇都は都市文化の基盤であり、都市文化そのものである。そのような視点において、古代都市文学は求めうる。したがって、それは、極めて、人工的な世界における、人工的な表現である。四周の山河と郊野、そして、そのうえにめぐる四季さえも、自然そのものではない。明確な理念と高度な理想とによって洗練され整えられている。それらを凝縮するのが、殊に、平安京において営まれる離宮や邸第の苑池である。

このような古代の都市文化の一分野であり、その総合的な表現として、古代都市文学はある。それは歴史と伝承との緊張関係のうちに生み出され、祭祀と行事との相関関係において執り行われる。そして、他ならぬ言葉においては、音声と文字との対立関係において表現される。

こうしたものとしての古代都市文学は、『日本書紀』や『萬葉集』、あるいは『源氏物語』や『古今和歌集』などのうちに見出すことができる。これらは極めて都市的生活に密着した、都市文化そのものである。そこに現出するのは人工的な都市空間である。それは現実的な都市空間ではなく、絵画や詩歌、物語などにおいて実現する。そこに現出するのは四季の循環を美的に象徴化した人工楽園ともいべき都市空間である。いずれにしても、古代都市文学は、天皇の都において求められる。あくまでも、それを貫くのは天皇の歴史である。

古代都市文学論 書紀・萬葉・源氏物語の世界 目次

まえがき

*

「六条院」の美学……………高橋 文二 7

——『源氏物語』小見——

源氏物語の郊野と苑池……………廣川 勝美 45

——平安京の山川體勢——

天皇の都と天変・地変……………神尾登喜子 147

——伝承と歴史の理念——

日の皇子の国土……………駒木 敏 241

——鎮めの都市——

*

あとがき

「六条院」の美学

——『源氏物語』小見——

高橋文二

一 「六条院」創設の想像力の性格

『源氏物語』という巨大な虚構の物語世界は、それが虚構であるということによって自ずと現実社会に対峙し、拮抗するものをもっているであろう。そのとき、現実社会とは、直接的には、作者が現し身を置いていた平安時代の摂関政治下の諸状況であろうが、と同時に、その物語が私たちの身を置く現代にあってもなお虚構の意義を強烈にもっている以上、現在の私たちの体感している現実もまたそのようなものとして対立的に浮かび上ってくるであろう。

例えば光源氏の創設した「六条院」という人工楽園を思い浮かべてみる。その虚構上の意味あいには単に平安時代の諸状況に対立・対応してあるばかりではなく、私たちの生きる現代の諸状況に対してもそのようなものとしてあるであろう。そこには基底的と言ってもよい虚構と現実との緊張関係があるが、しかし、物語世界の緊張関係は、当然のことながら、そのことに止まらない。物語自体のうちに構造的にさまざまな緊張関係が想定される。豊饒な物語であればあるほどそこに包含される緊張関係は多様で豊かな展開を示す。『源氏物語』という巨大な虚構の物語は、そのことを種々な形でまことに豊かに提示しているのではないかと思う。虚構の物語が、その虚構自体のうちにあって、さまざまな緊張関係の軸をもって、その物語世界の奥行きを深めているのではないかと思う。

虚構のこの物語の豊かさを確認するために、常識的なことだが、時間的なものと空間的なものの二つの基本軸をまず置いて考えてみるのがいいであろう。

『源氏物語』の世界が、光源氏の父母たちの恋物語から始まり、その生誕、青年期、壮年期の種々の

人間関係を描き、五十代前半の晩年の表情を追い、さらにはその死後の物語をも描いていったことは、その根幹の展相が時間的なものに大きく負っていることを自ずと示す。またさまざまな登場人物が、過去の思い出を懐かしんだり、行く先にあれこれの思いを抱いたりすることは、登場人物の心理のうちにも時間的な要素がさまざまな形で表れていることを語っていよう。そういう時間的なものに焦点を置いて、この物語の構造を問い、この物語の意味するものの一端を捉えることも可能であろう。

あるいは当時の平安京の都市空間の意義を問い、六条院や内裏の意味を尋ね、宇治や北山という場所のもっている意味あいをつまみこの物語の中に描かれている空間的なものの意味あいを問い尋ねることも『源氏物語』の世界の意味するものを解明することに大きく関っていくであろう。もちろん、時間的なものと空間的なものとを明確に分離し得るわけではないから、互いの強調はあくまでも一面の強調であり、一面の特質の照射であり、どちらかが正しいといった結論を導き出すものではない。時間的な照射によって、空間的な捉え方では見えないものが見えてくるであろうし、空間的な要素の探索はまた逆に時間的なものの探索からでは見えてこないものを明らかにすることにもなるが、要は両々相俟ってこの物語世界の豊饒さを浮かび上らせ、奥行の深さを照らし出していければそれにこしたことはない。

私はこれまで多く時間的なものに関りつつこの物語を論じてきたように思う。例えば「幻」巻に描かれて^いる思^い、出^いのありかた、過ぎた時間というものの重さの意味を問うことによってこの物語の特質の一面を明らかにしようと試みたりした。過去の思い出を懐かしみ、あるいはそれに苦悶する光源氏の心根を照射することは、時間的な要素というものが、この物語にあってまことに重いものである

ことを感じさせた。そのことを主張することは、この物語の特質を際立せる上できわめて大事なことであり、私には思われた。

だが、もちろん、そのことはこの物語の特質の一面を照らし出したにすぎないだろう。そういった方法では埒の明かない別種の対象が微妙な陰翳を宿してこの物語の中にはたくさんある。冒頭にも触れた「六条院」というこの世ならぬ建造物の意味を問うことなどは時間的な関心と方法だけではどうにもならないであろう。「六条院」のもっている象徴的な意味合いを問うこと、春夏秋冬の町々の意味合いを、例えばそこに住まう人物の性格や役割と連関させながら明らかにしていくということ、そのためには先の方法や視点とは違ったものが当然必要であろう。想像力の働きが、「幻」巻の思い出のありかたを探ったときとは大きく異なっていくであろう。

「幻」巻における光源氏の心のありようを問い尋ねたときには過去の事件や風物が思い起こされ、それを確認するために時間軸を過去に向って溯っていくことが多かった。なぜこんなに思い出ばかりが充満しているのであるかという思いが強くなった。

しかし、「六条院」という人工楽園を想起起こすときの想像力の働きは違う。俯瞰された平安京の、碁盤の目のように拡がる街路や家並が、仄暗く浮かび上がり、その仄暗い町並みの背後三方にこれまた仄暗い山並みが横臥し、それら仄暗さの中に六条院だけが金色の光を四囲に放って、しかし、不安気に揺れているように際立つ。私はなぜか東南の方角の高い高い所、さしずめ稻荷山のあたりの上空から都を斜交いに眺めている按配であって、六条京極近くにあった「六条院」の結構があざやかに見下されるといった具合なのである。「幻」巻の時間を追ったときに、私自身も光源氏の思い出の世界

に浸り、光源氏の悲痛な気持に共鳴しながら、死んだ紫の上を追懷したが、ここにあるものは対象を冷静に見下す客観的な眼差しであり、私はあたかも都市の建設のために、ミニチュアの都市を作りあげ、矯めつ眇めつしながらその造作の細部をいじくりまわしている設計者のような感じなのである。関心はもっぱら見下される空間的な世界の整備にあり、想像力の働きも、設計図を描き、ミニチュアの街造りをする技師のそのようなのである。

「幻」巻を追ったときの視点が時間的なものであるとすれば、ここにあるものは空間的なもの、場所に関る空間的な視座であると言ってよい。

俯瞰的な視線の関心は単に即物的な拡がりを確認することに終始するものではない。その拡がりのうちに構造を見出し、基本軸を設定し、ときに補助線を引いたりして、さらに別種の、くさぐさの意味を見出そうとし、そのことによって『源氏物語』の世界の意味づけを試みようとする。

例えば平安京を囲む東、北、西側の山々や山麓、また南側に拡がる湿地帯に目を遣って、それらの場所に隠された意味を探そうとする。東山は夕顔を茶毗に付した場所、北山は紫の上を見出した場所、西山は明石の君が住まい、光源氏が御堂を設け、あるいは朱雀院が隠棲した場所。それぞれの場所はそれら人物の意味あいを象徴するものとして拡がっているように思われる。南側は湿地帯で誰も住まってはおらぬが、その彼方には旧都平城京の幻影があり、さらに奥には長谷の観音や吉野があつて、何らかの意味を平安京に向って投げかけている場所のようにも思われる。光源氏が住まう「六条院」や天皇の住まう内裏がこれらの場所といかなる緊張関係をもっているのか、登場人物の特質などとも関連させながら問うていかなければならない。

あるいはまた別の構造軸もごく自然に思い浮かぶだろう。先に述べてきたことが、水平的拡がりにおける問いかけであるとすれば、次に考えられることは、これは単に空間的というものではないが、垂直的な軸を構想することによってこの物語世界の一端の意味を問うことである。例えば六条院はなぜ六条御息所の邸宅を一角に踏まえることによって造作されたのか。きらびやかに装われた、この世ならぬ大邸宅はなぜ六条御息所の死霊の影を基盤に、踏んで創設されねばならなかったのか。

地霊のような存在として捉えられることの可能な御息所の死霊は、その上に築造された「六条院」の建物と、言わば垂直的に対峙する。それらは地上と地下の緊張関係であり、天上に延びていくものを一見もたぬが、しかし、ここに単に空間的であることを超えて、例えば「天の眼」といったもの言（薄雲一四四〇、小学館「日本古典文学全集本」の巻数を示す。以下同じ）などのあることから、倫理的、宗教的に価値の高いものを上天に仮構して、天上——地上——地下の緊張関係を想い見ることも可能かもしれないが、もとより強いてそのように想い見ることもないであろう。なぜならば、六条院は美的な構築の意図そのものの中に既にして価値的なものを蔵して、御息所の死霊と拮抗し、滅びの予兆の中に震えているのであり、徒に上天に延びるものを仮構しなくとも——つまり仏教的な視点やら儒教的な価値規準やらを導入しなくとも、充分にその存在を主張し得るものを、六条院の構想そのもののうちにもっているからである。六条院の価値の根幹は上天からはやって来ず、上天の眼を欠いた、つまりきわめて虚無的な美的秩序の中に自ずと置かれているからである。このことの微妙な意味あいについては、つまりきわめて王朝的ありかたについてはおいおい語っていくことになるであろう。

二 間に拮抗する「六条院」世界

「六条院」という光源氏の權威と財力によって創設された人工樂園は、單に光源氏の妻妾たちを安らかに住まわせるために創設されたものではないであらう。より象徴的な意味あいが當時の美意識や宗教觀に深く関る形でそこにあったはずである。河原院やら高陽院やら法成寺やらとこの世ならぬ建造物が風雅の思いや憧憬の心に彩られて平安京のうちに造られたが、單にそういう豪華な建物であったというに止まらない。もっと微妙で重い意味あいがある物語の構想に深く関る形で存在していたに違いないと私はあれこれと推測する。

四季の園という自然の循環を美的に象徴化した人工樂園は、自然の展相に従順に身を預けているように一見見えながら、その実、野分の襲来にも脅えるような、自然への不信も藏しているようであり、また既にして人工樂園であるという意味で、その人工性、抽象性は自ずと自然に對峙してもいる。のみならずこの樂園のうちには、例えば「野分」巻に見られるような、垣間見によって生じた真面目青年夕霧の義母紫の上に対するあやしい思いの表れ（三―二五七）もあり、青年柏木と女三の宮との密会の如き光源氏への徹底的な裏切りのドラマも藏されており、しかも先にも述べたような、六条御息所の死霊に脅かされているような危うさもあり、つまりそれらの危うさ、暗さに抗する形で六条院のきらびやかな人工性は際立っているのである。「六条院」はその基盤にある六条御息所の死霊と垂直的に拮抗しつつ、同時にその豪華な四季の園そのものの園内に暗い情念のドラマを藏している。暗鬱なるものを包蔵し、またそれらに對峙してもいる「六条院」はその存立の根柢を何処に置いているの

であろうか。

その中核に神がいるわけでも仏がいるわけでもない。暗鬱なるものに抗しているものはけげやかな四季の彩りに満ちた自然の美であり、豪華な建物の結構であり、さらには光源氏自身の才能であり、美しさである。

例えば自然の美や秩序が、先に述べた如き暗鬱なるものに抗し得るほど確かなものであり得るのだろうか。あるいはまた光源氏の才能や美がそれに抗し得るものをもっているのだろうか。光源氏の場合を言えば、「六条院」の主として栄華の路程を歩んだ彼にあってもなお老いと死は確かなものとして、逃れ難く存在していた。そのような光源氏の存在を六条院の確かさの根拠に置くわけにはいかないであろう。

やはり自然の美が、そしてその整序と秩序化が、暗鬱なるものに抗し得る世界なのではないかと私は考える。確かに先にも触れたように「野分」巻の野分のように自然の荒々しさが時に人工楽園「六条院」の秩序を脅し、それが心の奥処にある暗い情念の自然とも響きあう一面もあり、作者の視線が単に自然の安寧静謐にのみ向けられていなかったことが判るが、しかしなお自然の美やその到来や循環の確かさは最も信頼に値するものとして「六条院」創設の意図の中核にあり、まさにそれをもって暗鬱なるものに抗しようとしたのではないかと考える。

「六条院」という人工楽園の意味を考えようとするとき、きわめて人工的な言葉の微妙な美しさや繊細さ、さらにはそうしたもののの中に確かさを見出しもした『古今集』の世界の美意識が思い浮かぶ。『源氏物語』の世界の中の人間関係の描写や自然描写の、言うところの纏綿たる情緒、その典型的な